

令和 6 年 5 月 28 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K01065

研究課題名（和文）プガチョーフ叛乱の総合的研究

研究課題名（英文）A Comprehensive Study of the Pugachev Rebellion

研究代表者

豊川 浩一（Toyokawa, Koichi）

明治大学・文学部・専任教授

研究者番号：30172208

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：プガチョーフ叛乱の重要で宗教的な問題については、論文「18世紀ロシアの民衆運動における古儀式派 プガチョーフ叛乱における古儀式派教徒の役割」とOld Believers and the Pugachev Rebellion: Pugachev's Strategy and Support by Old Believersとして刊行した。それらを基に、2024年10月には、著書『プガチョーフ叛乱 エカチェリーナ二世時代の「ロシア的叛乱」と民衆の世界』を刊行する準備をすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

プガチョーフ叛乱研究は、ソ連期には盛んに研究されてきたが、ソ連崩壊後には下火になった。新たな研究意義を見出すため、いま一度プガチョーフ叛乱についての研究史を通観しながら問題を根本から洗い直して、研究の総点検を行った。その結果、宗教に関する問題、とくに正統派正教から分かれた古儀式派教徒の動静が叛乱の動きに関わっていることがわかった。これは、歴史研究のみならず、文化人類学や文学とも関わるテーマであり、学際的な研究を推進するという意義があることが明確になった。それだけではなく、現代社会に生きる古儀式派教徒との歴史的事実との接合点を見出そうとする社会的なインパクトをも与えた。

研究成果の概要（英文）：The important and religious issue of the Pugachev Rebellion was discussed in the papers "Old Believers in the Popular Movements of Eighteenth-Century Russia: The Role of the Old Believers in the Pugachev Rebellion" and "Old Believers and the Pugachev Rebellion: Pugachev's Strategy and Support by Old Believers". Based on these articles, I will publish the book "The Pugachev Rebellion: The Russian Revolt and the World of the People of Catherine II's era" in October 2024.

研究分野：歴史学

キーワード：プガチョーフ叛乱 古儀式派教徒

1. 研究開始当初の背景

18世紀のロシア社会を構成するすべての範疇の民衆が参加していたこのプガチョーフ叛乱にこそ、当時のロシア社会の抱える重要な問題を検討するための要素があると考えた。これについて研究を遂行するため、次のような計画をたてた。第1に、関連する史料・文献についてロシアの古文書館と図書館で蒐集を行なう。第2に、それらを詳細に分析する。第3に、以上の成果について国の内外の学会で発表をし、それに対するレビューを受ける。第4に、関連する研究者の助言を得ながら再検討を行う。第5に、その成果を国の内外の雑誌に投稿する。以上の過程を通して、研究を完成する。

しかし、新型コロナウイルス感染症の急速な拡大および2022年2月から始まったロシアによるウクライナ侵攻により、研究方法に変更を余儀なくされた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、近世ロシア社会の抱える様々な問題点が最大限に噴出した1773~75年のプガチョーフ叛乱を総合的に研究することである。この叛乱には、ロシア人の農民・工場労働者・都市民・聖職者、カザーク(コサック)そしてバシキール人やタタール人といった非ロシア人など、当時のロシア社会を構成するすべての範疇の民衆が参加していた。旧ソ連史学とその後のロシア史学もこれを「農民戦争」と規定した。しかし、ピョートル一世(大帝)以来、エカチェリーナ二世のロシア国家が推し進めた国家・社会の近代化と地方への植民に対して、ロシア人民衆と諸民族の抵抗や反対が明確になった。その点に注目すると、先の規定には問題があると言える。それゆえ、未だ解決に至っていない叛乱の「イデオロギー」に焦点を当てながら、叛乱の本質を探るものである。

3. 研究の方法

すでに上で述べたように、新型コロナウイルス感染症の急速な拡大とロシアによるウクライナ侵攻により、研究の方法に大きな変更を余儀なくされた。

(2020年度)第1に、4月から7月まで研究文献と資史料の収集に努めながら、従来の研究の整理を行なった。第2に、8月にモントリオールで開催される予定の「第10回国際東中欧研究協議会2020年大会」で、「プガチョーフ叛乱における古儀式派の役割」について報告する予定であったが、翌年2021年に延期となったので、それを利用して発表のための準備をした。第3に、11月と翌年の2月、この報告内容について詳細な調査をするために、北海道大学の付属図書館およびスラブ・ユーラシア研究センターに出張した。

(2021年度)第1に、4月から5月まで前年度の研究成果を整理した。第2に、昨年度までの成果を国際会議で発表した。Старообрядчество и староверы во время восстания Пугачева. The 10th World Congress of ICCEES (International Council for Central and East European Studies) (2021年8月3日、Zoom)。

(2022年度)第1に、1年を通して前年度の研究成果を整理した。第2に、海外出張について、5月~7月、勤務する大学の短期在外研究制度を利用してフィンランド・ヘルシンキの国立図書館スラヴォニック・ライヴラリーで研究した。当該テーマの中で重要な論点である、政府の推し進めた近代化に反対して叛乱参加者が目指した「自由」について調べた。また2023年3月にも出張してさらなる研究を進めた。第3に、国内出張についてである。北海道大学の付属図書館およびスラブ・ユーラシア研究センターに出張して、2021年8月に発表した内容の点検を行った。

(2023年度)上で述べたように、諸事情のために研究の延長をした。その方法と成果は以下の通りである。第1に、1年を通して前年度までの研究成果を整理した。第2に、研究成果の一端を、日本の研究者と共に発表した。10月に「近代ロシアはいつどのように形成されたのか？

揺れ動く近世ロシアの国家・社会・文化」というテーマで『ロシア史研究会』大会でパネルを組織した。第3に、8月にフィンランド・ヘルシンキの国立図書館スラヴォニック・ライヴラリーで研究した。第3に、国内出張では、北海道大学の付属図書館およびスラブ・ユーラシア研究センターで研究を推進させた。以上を通して、当該研究の成果を『プガチョーフ叛乱 エカチェリーナ二世時代の「ロシア的叛乱」と民衆の世界』(山川出版社、2024年10月発刊予定)を準備することができた。

4. 研究成果

論文

- ・ Причинно-следственная связь восстания Пугачева с деятельностью Оренбургской экспедиции (Оренбуржская экспедиция: деятельность и результаты) / Сборник материалов (докладов) международной-научной конференции. Сохранение и развитие

духовной культуры и родного языка в условиях многонационального государства: проблемы и перспективы, посвященной 75-летию члена-корреспондента Академии наук Республики Башкортостана Кунафина Г.С. Ч. 2. Уфа: РИЦ БашГУ, 2021. С. 440-443.

- ・「18 世紀モスクワにおけるペストの流行と暴動に関する史料」『駿台史学』第 178 号、2023 年、99～125 頁（査読有）
- ・Old Believers and the Pugachev Rebellion: Pugachev's Strategy and Support by Old Believers, *Cross-Cultural Studies: Education and Science*, Vol. 8, Issue III, November 2023. pp. 15-30.（査読有）
- ・「ロシアの「大航海時代」と日本」『岩波講座 世界歴史 15 主権国家と革命』岩波書店、2023 年、215～232 頁
- ・「フィンランドの図書館事情 国立図書館を中心に」『図書の譜』第 27 号、2023 年、75～80 頁
- ・「ロシアの図書館事情 アナログとデジタルの共存」『図書の譜』第 28 号、2024 年、89～99 頁

報告

- ・ Старобрядчество и староверы во время восстания Пугачева. The 10th World Congress of ICCEES (International Council for Central and East European Studies)、(2021 年 8 月 3 日、Zoom)
- ・「「大航海時代」のロシアと日本の交流 ラクスマン使節日本派遣の背景を探る」『日露交流研究会』(2021 年 12 月 4 日、Zoom)
- ・「プガチョーフ叛乱前夜の国家と社会 1771 年のモスクワのペスト一揆を中心に」『日本 18 世紀ロシア研究会』(2022 年 9 月 23 日、於明治大学)
- ・ The Old Believers and the Pugachev Rebellion: Pugachev's Strategy and Support by the Old Believers (Study Group on Eighteenth-Century Russia XI International Conference 10th-14th July 2023)(2023 年 7 月 14 日、ZOOM)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 豊川浩一	4. 巻 28
2. 論文標題 ロシアの図書館事情 アナログとデジタルの共存	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 図書の譜	6. 最初と最後の頁 89、99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 豊川浩一	4. 巻 Vol. 8, Issue III
2. 論文標題 Old Believers and the Pugachev Rebellion: Pugachev 's Strategy and Support by Old Believers	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Cross-Cultural Studies: Education and Science	6. 最初と最後の頁 15、30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24412/2470-1262-2023-3-15-30	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 豊川浩一	4. 巻 178
2. 論文標題 18世紀モスクワにおけるベストの流行と暴動に関する史料	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 駿台史学	6. 最初と最後の頁 99、125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 豊川浩一	4. 巻 27
2. 論文標題 フィンランドの図書館事情 国立図書館を中心に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 図書の譜	6. 最初と最後の頁 75、80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 豊川浩一	4. 巻 15
2. 論文標題 ロシアの「大航海時代」と日本	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 岩波講座 世界歴史 15 主権国家と革命	6. 最初と最後の頁 215, 232
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 豊川浩一	4. 巻 2
2. 論文標題 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名	6. 最初と最後の頁 440, 443
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 豊川浩一
2. 発表標題 The Old Believers and the Pugachev Rebellion: Pugachev's Strategy and Support by the Old Believers
3. 学会等名 Study Group on Eighteenth-Century Russia XI International Conference
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 豊川浩一
2. 発表標題 プガチョーフ叛乱前夜の国家と社会 1771年のモスクワのベスト一揆を中心に
3. 学会等名 日本18世紀ロシア研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 豊川浩一
2. 発表標題
3. 学会等名 The 10th World Congress of ICCEES (International Council for Central and East European Studies)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 豊川浩一
2. 発表標題 「大航海時代」のロシアと日本の交流 ラクスマン使節日本派遣の背景を探る
3. 学会等名 日露交流研究会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------